

「新年のご挨拶」

公益社団法人 熊本県精神科協会 会長 相澤明憲

平成30年を迎え、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

一昨年の熊本地震からもうすぐ2年の時間が過ぎようとしています。まだまだ復興の道は長いのですが、しかし確実に一步一步前に進んでいるものと考えます。大きな被害を受けながら、そこから新たな展望をもって再建に取り組まれている会員病院の方々には大いに敬意を表するものです。

協会としては、熊本こころのケアセンターの運営、熊本 DPAT への協力のための協定調印などを行うとともに、協会誌の特別号として地震を振りかえる特集号をまとめました。さらに、いつか来ると予想される災害に対しての対応マニュアル作りに取り組んでいます。平成29年度中には完成させたいと思いますが、このマニュアルができるだけ役立つようなことのないことを祈っています。被災した会員病院の復興や地域の人たちの震災後の精神保健の問題など、まだまだ地震後の課題は山積しており、協会として取り組むべきことにはしっかり取り組んでいかねばならないと考えます。

昨年9月には協会の震災対応に対し、防災功労者として防災担当大臣表彰を受けました。地域の精神科医療に対する責任感と会員同士の互助の精神が発揮されたことが認められたものと考えています。それらは当協会の伝統であり、このたびの受章はそういう意味でも大変に名誉なことでした。

平成29年度に予定されていた精神保健福祉法の改正が、国会解散というハプニングで仕切り直しになりました。本年度内には再度改正案が上程されることになるはずですが、昨年と同じようなことを書きましたが、あまりに理念だけが先走って現実性に欠けるような法制度にならないように、しっかり注目していく必要があります。

県レベルでは第7次医療計画と第5期障がい福祉計画の策定と第5期障がい者計画の中間見直しが行われ次年度からスタートすることになります。いろいろな面で精神科医療福祉について行政からの言及があります。精神科医療に関して言えば、正直いらぬおせっかいだと思うような条文もあります。行政施策に目を配ることは必要ですが、現場の医療活動に携わる私たちは、地域の人たちの要望にしっかりと応えていけば道を誤ることはないと考えます。精神科救急、地域移行、認知症対応、依存症、児童思春期などの課題に対して、協会の皆さんの努力により少しずつではあっても前進していると感じています。

平成30年4月には、医療、介護、障害福祉に関する報酬の同時改定が行われます。今後少子高齢化が進むため、医療福祉の予算が膨らみ続けると国の財政が立ち行かなくなると言われます。将来世代につけを残すとも言われます。しかし将来の人たちのために緊縮をしたせいで今の福祉や医療が破綻したら、お金は残ってもそれを使って医療や福祉を受けることができないということになるのでないでしょうか。もちろんシステムの無駄をなくし効率的・合理的なものにしていくことは大切だと思いますが、歴史上行き過ぎた緊縮が国民を不幸にした例はたくさんあると思います。

年末年始は家でゆっくりしていたので、普段あまり見ないテレビの報道番組なども見ました。どの番組もたいいてい暗い。あれもこれも大変だとばかり言っていました。ある番組ではどこかの哲学の先生が、江戸時代は経済成長など目指していなかったがみんなそこそこ幸せだったのだからもう経済成長を目指すのはやめればよい、と言っていました。江戸時代は士農工商の厳格な身分制度が

あり、今とくらべればはるかに窮屈な社会でした。まあそれはそれなりに幸せと考える人もいるかもしれないが、生活の問題として何度も大飢饉が起きて何万人もの人が飢え死にしたことや、幕末には一揆が頻発して騒然としていたことなど、まともな歴史の本を見れば書いてあるのに…。そういうことは電気も水道もスマホもウオシュレットも使わない生活をしてから言ってもらいたいもんだと思います。

子どもが減る人口が減ると騒ぐけれども、江戸時代の初め頃日本の人口は一千二百万人ぐらい、明治維新のころにだって三千万人ぐらいだったとのこと、それに較べればまだまだ人は多い。社会の進歩のおかげで、一人の人間の産み出す価値だっけずっと大きくなっています。次の世代の人たちは、私たちよりもっと知恵を働かせて大きな価値を生み出すに違いないという風に考えられないのだろうかと思います。ダメだダメだ日本はもうダメだと言いつけることの方が、よほど社会に害悪を流しているような気がするの、私が能天気なためだけではないと思います。

寿命が長くなり、高齢者の割合が多くなること

に対して何か災厄であるかのように言うことにも大いに疑問を感じます。古来日本社会は老いを貴んでいたはずで、幕府の偉い人は大老であり老中です。その次に偉いのは若年寄と言っている。最近話題の相撲社会では、今でも「年寄」という地位が存在しています。老いを貴ぶということは世界中の民族に共通することであり、その理由はそのような民族が何らかの優位性を持っているため、そうでない民族との競争に勝って残ったのであるという説を読んだことがあります。もしそうであるなら、老いを貴ぶ習慣をなくした民族は徐々に衰退して行くに違いありません。

私事で恐縮ですが、数えの九十七まで生きた私の母は、七十五で亡くなった父について話すときに、もっと長生きをしてもらって孫たちが成長するのを見せたかった、自分だけがうれしい思いをして申し訳ないと言っていました。長生きをすればよいことがたくさんある社会が実現されることを期待し、当協会もそのために力を尽くしたいと考えます。

本年もどうかよろしくお祈りします。